

「信仰のないわたしを」

マルコによる福音書 9章20～24節

法人事務局広報部マネージャー 松田 慶光

聖書に、一人の父親とイエス様との対話が描かれています。父親には、息子がいました。息子は幼い頃から霊にとりつかれていて、ところかまわず地面に倒れ、口から泡を吹き出し、はぎしりして体をこわばらせていました。父親はイエス様に助けを求めます。「おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください。」イエス様は父親に答えます。「『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる。」そこで父親は叫びます。「信じます。信仰のないわたしをお助けください。」

この聖書の言葉に初めて出会ったのは、大学3年生の冬でした。その時私は受洗準備のために、古い教会の建物の2Fで牧師と聖書を開いていました。当時の私は、自分自身の在り方に不安を抱えていました。ほとんど、絶望的と言っても良いくらいでした。いつも人の言葉が気になり、将来も特別にやりたいことなどなく、価値観はメディアや書籍に触れるたびに揺り動かされていました。全く確かなものが感じられない中で、確かなものに従いたいと願っていました。一方で、クリスチャンになることも不安でした。「私に信仰があるだろうか」という問いの前で、立ちすくんでいました。

聖書に描かれている父親も、信仰深い人というよりはイエス様を少し疑っている様子が見られます。「おできになるなら助けてください」という言葉があります。できれば、やってもらえますか？という尋ね方は一見丁寧なように見えますが、ある意味では相手と距離を置く言葉です。「信仰者」という姿からは遠いでしょう。助けは求めている。でも、救いへと伸ばされた手は何としてでもその先にある希望を掴む、という気迫はなく弱々しく震えています。まさにその弱さの中で、イエス様は語るのです。「『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる。」

父親にとって愛する息子のことが大きな人生のテーマであったことは間違い無いでしょう。愛する息子の苦しみは、父親の苦しみそのものです。それでも、イエス様は父親自身の信仰に迫ります。「『できれば』と言うか」と。その問いの前で、父親の問題は息子のことから自分の信仰であることがはっきりと示されました。誰かが自分たちを助けてくれない、とか環境が不確かだという問題ではないのです。そこで父親は叫びます。「信じます。信仰のないわたしをお助けください。」私たちの歩みにも、自分の信仰の有無を超えたイエス様の招きがあります。問いかけがあります。この聖書の箇所に触れるたび、受洗への思いが与えられた時のことを思い起こします。

祈りの言葉

天の神様、自分の信仰が不確かな時にも「信じます」と告白する言葉と祈りを与えてください。イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。

2021年12月1日 聖学院大学 全学礼拝